

世界に触れた一週間

彩都友紘会病院 寺内 香澄

今回私が海外研修に応募した理由は、最先端の研究を行っている Stanford 大学でどのような研究が行われているのか、米国の医療の現場はどうになっているのか、日本の放射線技師のレベルは米国と比較してどうなのか、また 7TMRI や分子イメージングに興味があり、今後の自分の研究のヒントが何か見つかるのではないか、というのが主な理由であった。

午前中は講義、午後からは病院や研究施設、リニアック工場の見学といったスケジュールが組まれていた。夕食後には、毎晩遅くまで非常に活発な討論や意見交換が行われた。そのうち 2 日は指定されたテーマに沿って討論を行うという場が設けられた。

まず 1 つ目に、学会の国際化について、主に英語のセッションの是非について話し合いを行った。2 名の方々から他学会の動向が報告された。やはり英語のセッションは重要視される傾向にあり、多少発表者に負荷がかかつたとしても徐々に導入されているのが現状である。問題点としては、英語でセッションするにふさわしい演題かどうかの判断や、発表者や座長、質疑応答の際に求められる英語力の問題、そもそも英語のセッションに人が集まるのかどうか、など様々な問題が挙げられた。対応策としては、事前に発表内容を確認した上で、内容のよい演題に対してのみ英語での発表の推奨、それに向けての学会のバックアップ、英語で発表する者に対する賞や特典（参加費の割引等）など、いろいろなアイディアが提案された。今回の研修を通して、日本の放射線技師の持っている技術はアメリカのものと比較しても決して劣っておらず、十分に世界に発信していくものだと感じた。日本の優れた演題を世界に発信していくために英語は不可欠であり、そのためにも技術学会にはその支援をして頂きたいと思う。私自身、技術学会や地方部会である近畿部会の勉強会に参加することで知識を得たり、論文を書く時にアドバイスを頂いたりと、普段から技術学会及び近畿部会には非常にお世話になっているので、英語発表という面でも是非サポートを期待したいと思う。しかし一方で、学会の国際化の前に各演題の内容やスライドの構成等を厳しくチェックすることで演題の採択率を下げ、学会としてのレベルを上げる、地方部会の学会でまずは演題発表の練習をしてから全国大会に挑戦するといった形にすべきなのではないかという意見も出た。学会の質の向上、ひいては技術学会の学術大会で発表することにブランド力がつくことを期待している。

2 つ目に、学術大会のあり方について、という討論では実際に 2 名の方が自分が大会長になったらどのような学会を開催したいかについて発表された。これは非常に面白い試みで、2 名の方々も短期間で仕上げたとは思えない内容の発表であった。そこでも問題になったのは、技術学会としての目標についてであり、学会のレベルを向上していくのか、学会の底上げを行うのか、についてであった。教育講演と発表の割合について着目されたが、教育講演は地方部会に任せ、学会では発表を重要視すべきという意見と、教育講演専用の場所を作つて期間中は多くの教育講演を行う、という意見が出た。また全ての演題の cypos 登録やサテライト会場の設置など、より情報を手に入れやすい環境作りについても意見が出た。

2 日間の討論を経て、今回研修に集まった私達の意見がそのまま現放射線技術学会会員全員の意見ではないと思う。まずは、技術学会の方向性をきちんと定め、会員に周知することが重要なのではないかと思った。

今回の研修では多くの素晴らしい方々との出会いがあった。研究分野が異なったり、遠方だったり、普段はまず話す機会のない方々と、経験やそれぞれのバックグラウンドを抜きにしてたくさんのことを語る機会に恵まれた。同じ考えを持っていたり、新しい考えを頂けたり、とても刺激的な一週間を送ることができた。今回の研修を通して得ることのできた知識やモチベーションを大切にして、仲間に負うことのないように今後もますます精進していくと思う。

もしこの体験記を読んでいて、自分も海外研修に応募しようかと迷われている方がいれば、私は是非挑戦して頂きたいと思う。最先端の研究に触れ、米国の医療の仕組みや現状を知ることは、自分の放射線技師としてこれからについて考えるヒントになると思う。放射線技師としての様々な可能性を感じることができるので、この貴重な機会を是非多くの方に得て頂きたい。

最後になりましたが、今回このようなすばらしい研修の機会を与えていただいた日本放射線技術学会、引率の田中先生、Stanford 大学ならびに GE HC-J の皆様に深く感謝致します。



Stanford で働くスタッフの方々と交流する機会もあり、現場の生の声を聞くことが出来ました。筆者は中央